



社会疫学

リサ・F.バークマン, イチロー・カワチ, M.マリア・グリモール編 ;
上, 下. -- 大修館書店, 2017.

ISBN: 9784469268294 / 9784469268300

REVIEWER

医学研究科 社会健康医学系専攻
M1

世なおしへ われら社会の 医療者に

病気になることは「自己責任」だ! と考えるひとは少なくないのではないだろうか?

タバコやお酒をやめられなくて、がんや循環器疾患になること、などなど。個人の健康は、個人の行動によって決まるものだという考え方は、一般的にも医学的にも強く信じられている。しかし、そう言い切れない、と本書は主張する。

例えば、早期教育を受けた集団と受けなかった集団とを、長期的に比較すると、早期教育を受けた集団の方が、抑うつ症状が低いことや成人以降の健康状態が良好であることなど、教育と健康指標との関連が示された。その他にも、労働と健康、怒りや不安といった感情と健康、などとの関係を明らかにした研究例を論文とともに紹介している。

さて、健康問題は個人的な問題（自己責任）であるのだろうか？

本書のタイトルである『社会疫学』という学問分野では、個人へのアプローチ（ハイリスクアプローチ）だけでなく、社会へのアプローチ（ポピュレーションアプローチ）も組み合わせることによって、個々人の健康の向上を目指している。すなわち、健康問題は個人の問題だけではなく、社会の問題でもあるというのだ。本書は「社会疫学」のパイオニア、Harvard University School of Public Healthのイチロー・カワチ教授ら（医療界のイチローといえ、このひと!）がまとめた原書第2版の邦訳である。本書はとても読みやすく日本語訳されているが、第4章から第6章や第12章などは文化的背景等のニュアンスを含め、原書（※1）で読むと理解しやすいように思われる。

（裏へ続きます）

498

B 38

医図開架

⇒⇒⇒

なお原書は、ハーバード大学での人気講義「Society and Health」の指定教科書でもあり、原書第1版が出たときには、「This book is an extraordinary work of scholarship.」という書き出しで、あのNew England Journal of Medicineが大絶賛であった（※2）。原著第2版が出たときも、伝統的な疫学雑誌American Journal of Epidemiologyで書評が掲載された（※3）。ぜひ本書を手に取り、一読ならぬ熟読してほしい。健康への見方が変わり、医療者としてある種の無力感を味わうかもしれない。しかし、医療から社会をより良くできる、そのヒントが見つかるはずだ。この本はあなたにとって、新たに健康科学の面白さと意義に出会える一冊になるであろう。

※1 原書『Social Epidemiology 2nd』も電子版で蔵書！

<https://m.kulib.kyoto-u.ac.jp/webopac/EB05841951>



※2 New England Journal of Medicineの書評

<http://www.nejm.org/doi/full/10.1056/NEJM200010053431417>



※3 American Journal of Epidemiologyの書評

<https://academic.oup.com/aje/article/182/7/660/108045>



受理：2018-03-20